

病害虫発生予察情報予報第 6 号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要

作物名	病害虫名	9月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
山間 早植え 水稻	紋枯病	並	並	149~151	 ホリハカムシ
	トビイロウンカ	やや多	多	157~159	
	斑点米カメムシ類	多	多	167~168 185~188	
普通期 水稻	穂いもち	やや多	並	142~147	 トビイロウンカ
	紋枯病	やや多	やや多	149~151	
	白葉枯病	並	並	148~149	
	トビイロウンカ	やや多	多	157~159	
	コブノメイガ	やや多	やや多	164~165	
	斑点米カメムシ類	多	多	167~168 185~188	
特記事項	<p>1. トビイロウンカ 防除適期は9月1半旬頃と考えられる。各圃場での発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期に防除を行う(対策資料第7号参照)。 9月中~下旬に発生状況を確認し、老齢幼虫及び成虫が1株当たり5頭以上みられる圃場では臨機防除を行う。</p> <p>2. いもち病 葉いもちの発生がみられる中晩生品種(さがびよりやもち品種)ほ場では、穂ばらみ期~出穂期の防除を徹底する。発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも防除を行う。</p>				
大豆	紫斑病	並	並	197~198	 ハスモンヨトウ
	ハスモンヨトウ	多	多	202~203 208~210	
	カメムシ類	多	多	203~204 210~211	
特記事項	<p>1. ハスモンヨトウ 生育が進んだ圃場で白変葉(若齢幼虫の集団による被害)の発生が認められる。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が増加し始めた時期に確実に防除を行う。</p>				
普通作 全般	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺の環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期や散布時間等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>				

作物名	病虫害名	9月の予想発生量 ^{注1)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ(育苗圃)	ハダニ類	多	多	205~206	 ハダニ類
	うどんこ病	少	並	195~197	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	やや多	やや多	199~203	
	アブラムシ類	並	並	210~211	
特記事項					
<p>1. ハダニ類 一部に発生株率が高い圃場が見られる。苗による本圃への本虫の持ち込みを防ぐため、古葉の葉かぎを行うとともに丸噴口等を用いて丁寧に薬剤散布を行う。</p> <p>2. 炭疽病、疫病、萎黄病 発病苗は直ちに圃場外で適切に処分し、周辺の苗への伝染を抑える。また、炭疽病については10~14日間隔での薬剤防除を実施する(平成28年7月14日付け病虫害対策資料第2号参照)。定植株は感染、発病のないものを利用する。</p>					
アスパラガス	褐斑病	やや多	やや多	318~319	 ハダニ類
	茎枯病	並	並	317~318	
	斑点病	並	やや少	318	
	アザミウマ類	多	多	321	
	ハダニ類	多	多	321~322	
特記事項					
<p>1. 褐斑病 晴天日には施設開口部を開放し通風を図る。発生圃場では、10~20日間隔での薬剤防除を実施する。</p> <p>2. 茎枯病 降雨時はサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐ。また、発病茎は見つけ次第除去し、圃場外で適切に処分する。</p> <p>3. ハダニ類 一部の圃場で発生がみられる。虫見板(約20×30cm)への払い落とし調査(擬葉部を2~3回叩く)を定期的実施し、早期発見に努める。また、ハダニ類の食害による茎葉の黄変は、日焼けによる黄変と類似しているため、圃場内の黄変部位は特に払い落とし調査を実施し、寄生が認められる場合はただちに薬剤防除を行う。</p>					
キュウリ	<p>1. アザミウマ類、コナジラミ類 これらの害虫が媒介するウイルス病の発生を防ぐため、育苗時期から本圃初期の防除を徹底する。 ①育苗期後半から定植時に粒剤を施用し、本圃初期の発生を防ぐ。 ②施設開口部に防虫ネットを設置して、圃場内への侵入を防ぐ。 ③圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。</p>				
野菜・花き共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ) (オオタバコガ)	多	多	160, 162 イチゴ: 208~209 ナス: 243~240 アスパラガス: 320, 323 カ: 387~388	

作物名	病害虫名	9月の予想発生量 ^{注1)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
カンキツ	かいよう病	並	並	220~222	カンキツ黒点病 
	黒点病	多	多	218~220	
	ミカンハダニ	多	多	239~242	
	チャノキアザミウマ	並	やや多	236~238	
特記事項 1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので収穫時に取り除き処分する。また、腐敗防止対策の薬剤散布は収穫7~10日前に、霧状なるノズルを使って果実一つ一つ丁寧に散布する。 2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前~前日までに必ず銅水和剤の散布を行う。 3. 黒点病 秋雨は発病を助長するので防除を徹底する。枯れ枝は伝染源となるので、除去・処分する。 4. ミカンハダニ 一部圃場で多発している。今後も温度が高く発生しやすい条件となるため、低密度時(寄生葉率 30%未滿または1葉当たりの雌成虫の数が0.5~1頭)からの薬剤散布を行う。 5. ハナアザミウマ類 高温乾燥が続くと多発することがあるため、果実の着色期以降、園内をよく観察し、果実での被害を確認したら、早急に薬剤を散布する。園内及び園周囲の雑草は、ハナアザミウマ類の発生源となるので、果実が着色する前までに除草作業を行う。 6. ミカンザビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害が発生しはじめた園では、早急に薬剤を散布する。					
ナシ	黒星病	やや少	やや少	282~285	
	ガビツカイ	やや多	やや多	296~299	
	ハダニ類	多	多	301~303	
特記事項 1. ハダニ類 多くの圃場で多発している。今後も温度が高く発生しやすい条件となるため、低密度(寄生葉率 10%未滿または1葉当たりの雌成虫数0.5頭以下)から薬剤散布を徹底する。 2. 黒星病 翌年の伝染源を減らすために、収穫終了後も防除を徹底する。					
ブドウ	べと病	やや少	並	330~332	
	褐斑病	やや少	やや多	332~333	
特記事項 1. べと病 べと病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のために、収穫終了後の防除を徹底する。					

作物名	病虫害名	9月の予想発生量 ^{注1)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注2)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹 全般	果樹カメムシ類	並	<u>やや多</u>	かんキツ：245～248 ナシ：299 ブドウ：344 384～386	
	特記事項 1. 果樹カメムシ類 果樹園への飛来は概ね10月1～2半旬頃と予想されるが、一部地域では、予察灯の誘殺数が増加しており果樹園に飛来している可能性がある。発生量や飛来時期は地域によって異なるため、各園の飛来状況の把握に努め、飛来が認められた場合には、直ちに防除を実施する。 2. 夜蛾類 夜蛾類の成虫による果実被害が認められている。園周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等は夜蛾類幼虫の食草となるので除去する。また、忌避灯を設置している園では、点灯時間は日の出・日没の時刻に合わせて調整する。				
茶	炭疽病	やや少	並	393～394	 カンザワハダニ
	輪斑病	やや少	並	394	
	カンザワハダニ	<u>多</u>	<u>多</u>	398～399	
	クワシロカイガラムシ	<u>多</u>	<u>多</u>	405～406	
	チャノミドリヒメヨコバイ	<u>多</u>	<u>多</u>	403～404	
	チャノキイロザミウマ	<u>多</u>	<u>多</u>	404～405	
	チャノコカモンハキ	<u>やや多</u>	並	401～403	
	チャノホガ	<u>やや多</u>	<u>多</u>	400～401	
特記事項 1. カンザワハダニ 一部に多発生した茶園が認められる。多発してからでは防除効果が十分得られないため、低密度時からの防除を徹底する。 2. クワシロカイガラムシ 防除適期にあたる第三世代幼虫ふ化最盛期は9月中～下旬頃である。園内のふ化状況を確認し、適期に防除を行う。第三世代は幼虫ふ化期がばらつくため、多発生園では7～14日間隔で防除を二回行う。 3. チャノキイロザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ 一部に多発生した茶園が認められる。秋芽の生育が遅れている園では開葉期に防除を行い、多発生園では、さらに一週間後を目安に追加防除を行う。 4. チャトゲコナジラミ 防除適期にあたる幼虫ふ化最盛期は9月上～中旬頃である。園内の発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫発生期）に防除を行う。					

注1) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注2) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
 6 ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 9 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（平成 28 年 8 月 24 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 9 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	30 (24.2℃)	60	高い
降水量	30	30 (179.5 mm)	40	並

Ⅲ. 9月の予報

水稻（山間早植え）

巡回調査 8月18日



巡回調査圃場の様子（早植え水稻）

1. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率0%（平年1.9%、前年0.8%）
平年比：少（-） 前年比：やや少（-～±）
 - ②9月の気象予報
気温は高く、多発生の条件（+）
 - (2) 防除上注意すべき事項
各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘まで達している場合には直ちに防除を行う。

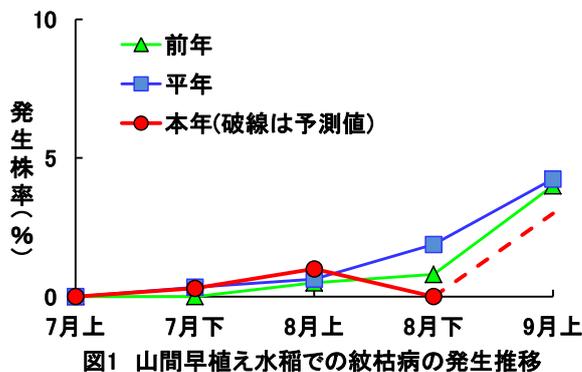


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

2. トビイロウンカ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率0.5%（平年4.0%、前年0.5%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - ②9月の気象予報
気温は高く、多発生の条件（+）
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 圃場における発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期（防除適期）に防除を実施する（平成28年8月17日付病害虫対策資料第7号参照）。
 - (2) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。

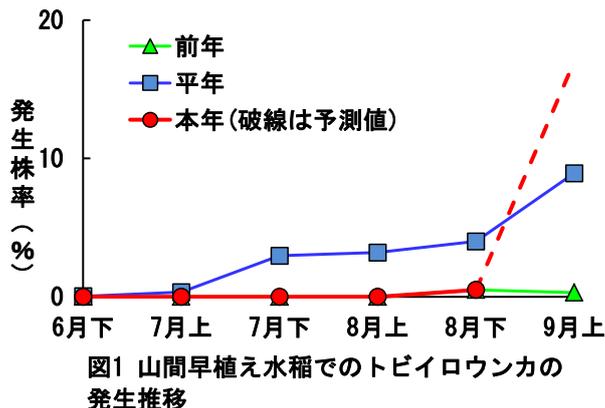


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

水稻（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期水稻）

（巡回調査日：8月17～23日）



巡回調査圃場の様子（普通期水稻）

1. 穂いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年並）
- 2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況
 - ①巡回調査 (図1 参照) 【葉いもち】
 - 発生株率 20.7% (平年 11.1%、前年 21.8%)
 - (発生圃場率 47.9%)
 - 平年比: やや多 <一~十> 前年比: 並 <±>
 - (2) 9月の気象予報
 - 並発生の条件 <±>
- 3) 防除上注意すべき事項
 - 特記事項を参照。

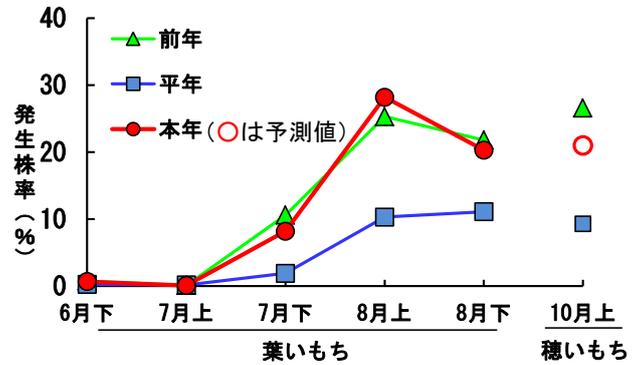


図1 普通期水稲でのいもち病の発生推移

2. 紋枯病

- 1) 予報の内容
 - 発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査 (図1 参照)
 - 発生株率 1.1% (平年 2.8%、前年 4.5%)
 - 平年比: やや少 <一~±> 前年比: 少 <一>
 - (2) 9月の気象予報
 - 気温が高く、多発生の条件 <+>
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - 各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘まで達している場合には直ちに防除を行う。

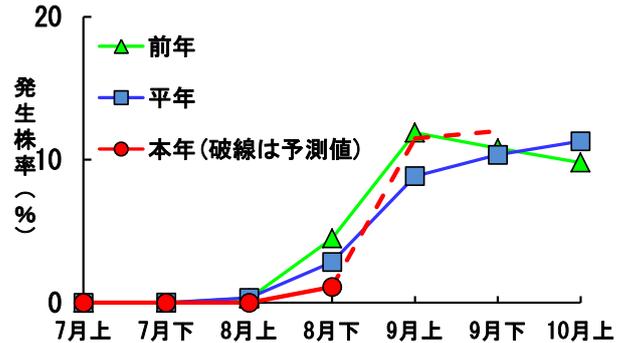


図1 普通期水稲での紋枯病の発生推移

3. 白葉枯病

- 1) 予報の内容
 - 発生量: 平年並 (前年並)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査
 - 発生株率 0% (平年 0.0%、前年 0.0%)
 - 平年比: 並 <±> 前年比: 並 <±>
 - (2) 9月の気象予報
 - 並発生の条件 <±>
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - 本病の発生圃場では、露が水稻に付着している時間帯は圃場へ入らない。

4. トビイロウンカ

- 1) 予報の内容
 - 発生量: 平年よりやや多い (前年より多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査 (図1 参照)
 - 発生株率 0.1% (平年 4.5%、前年 0.3%)
 - 平年比: やや少 <一~±> 前年比: 並 <±>
 - (2) 9月の気象予報
 - 気温が高く、多発生の条件 <+>

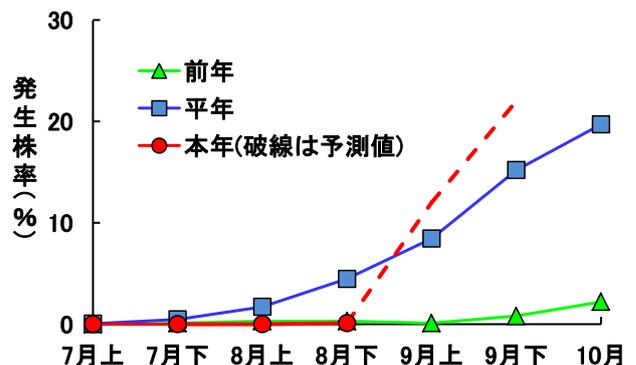


図1 普通期水稲でのトビイロウンカの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。
- (2) その他は、特記事項を参照する。

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1 参照）

発生株率 6.3%（平年 18.5%、前年 18.2%）

平年比：やや少く（一～±） 前年比：やや少く（一～±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

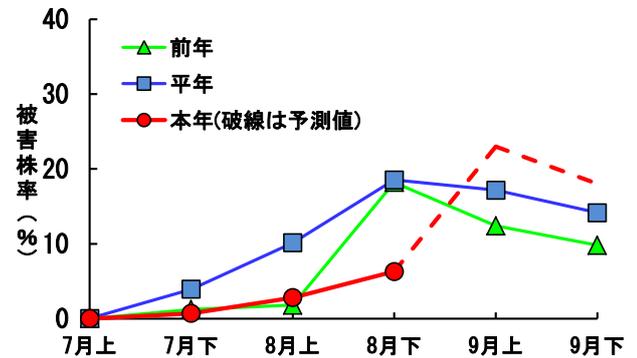


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の約7日後（幼虫ふ化揃い期）に防除を実施する。

6. 斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミ

カメ、ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 水田隣接のイネ科植物での捕虫網によるすくい取り調査（8月18～23日）

発生量は平年及び前年並（表1）（±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、防除要否を判断する。

穂揃い期～乳熟期に、ほ場内の20回すくい取りで5頭以上いる場合は防除を実施する。

(2) 多発生時は穂揃い期とその7～10日後に防除を行う。少発生の場合は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2016年8月18～23日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市①	空き地	イノコクサ類	17	35	8	3	1	17	8	0	0
佐賀市②	道端	イノコクサ類	0	0	7	1	0	0	1	0	0
佐賀市③	道端	イノコクサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小城市①	畦畔	イノコクサ類	1	1	3	0	0	0	0	0	0
小城市②	空き地	イノコクサ類	7	0	3	1	2	5	0	0	0
神埼市神埼町	空き地	イノコクサ類	0	0	6	0	4	0	0	0	0
鹿島市	道端	イノコクサ類	0	0	4	2	3	0	4	2	0
みやき町	道端	イノコクサ類	0	0	7	1	0	0	1	0	0
白石町①	道端	イノコクサ類	0	0	1	1	0	0	2	0	0
白石町②	道端	イノコクサ類	0	0	4	3	0	1	2	1	0
本年(平均)			2.5	3.6	4.3	1.2	1.0	2.3	1.8	0.3	0.0
前年(平均)			2.5	8.6	2.5	1.0	0.8	1.4	18.8	7.0	0.0
平年(過去10年の平均)			3.7	6.8	1.3	0.8	0.5	0.7	18.7	11.1	0.0

大豆

(巡回調査日：8月17～23日)



巡回調査圃場の様子 (大豆)

1. 紫斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並 (前年並)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 9月の気象予報
並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
若莢期～子実肥大中期に防除を実施する。

2. ハスモンヨトウ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い (前年より多い)
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査 (図1 参照)
発生株率 1.9% (平年 1.4%、前年 1.2%)
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
 - ②フェロモントラップ (図2 参照)【県内9地点】
平年比：やや多(±～+)
 - (2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件〈+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 防除後も、新たな白変葉の発生を確認したら、追加防除を実施する。
 - (2) その他は、特記事項を参照する。

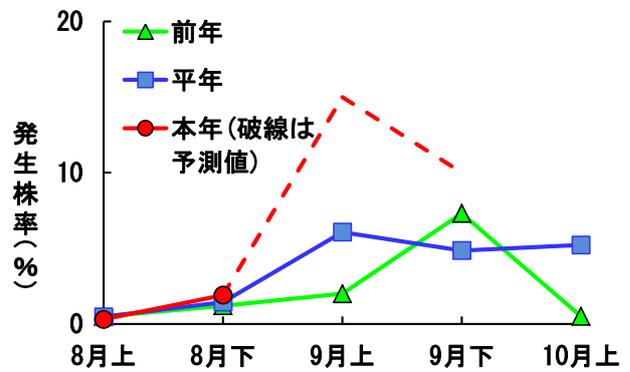


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

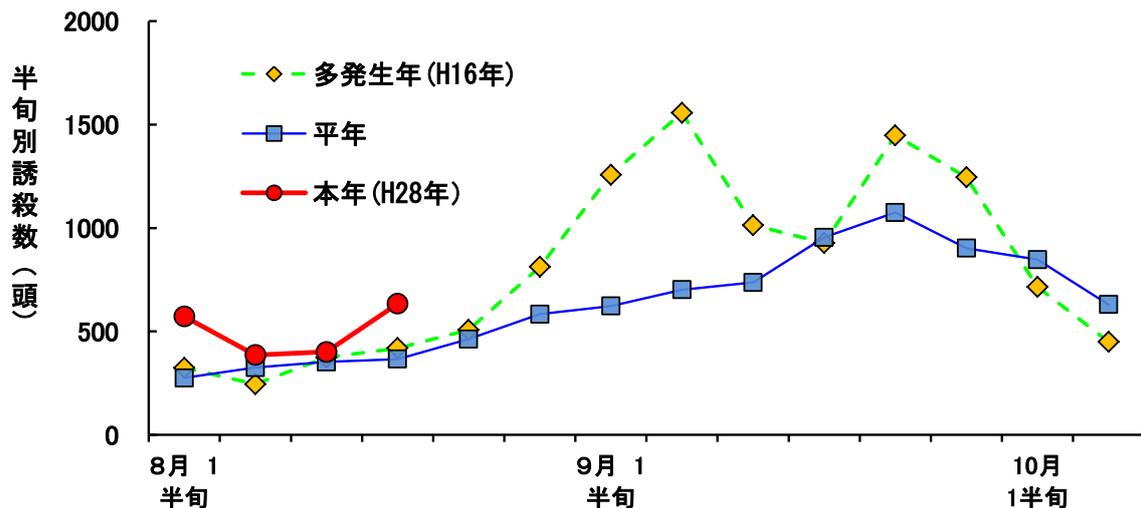


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数 (10月2半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。)

3. カメムシ類 (アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容
発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠
(1) 発生の現況
①巡回調査(図1参照)
発生株率0% (平年0.1%、前年0.0%)
平年比：並(±) 前年比：並(±)
(2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件(+))

3) 防除上注意すべき事項
(1) カメムシ類の防除は、莢の伸長初期～子実肥大中期(9月中旬頃まで)が効果的である。発生の多い場合には、7～10日間隔で2～3回防除を行う。
(2) 防除に当たっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

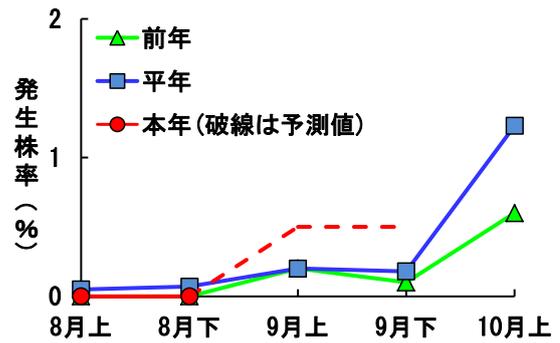


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ (育苗圃)

(巡回調査 12 圃場、苗を調査
調査日：8月17日～23日)



巡回調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容
発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠
(1) 子苗での発生の現況
①巡回調査(図1参照)
発生株率：14.9% (平年11.4%、前年7.6%)
平年比：やや多(±～+) 前年比：やや多(±～+)
(2) 9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件(+))

3) 防除上注意すべき事項
(1) 病害虫対策資料第9号参照。
(2) その他は、特記事項を参照。

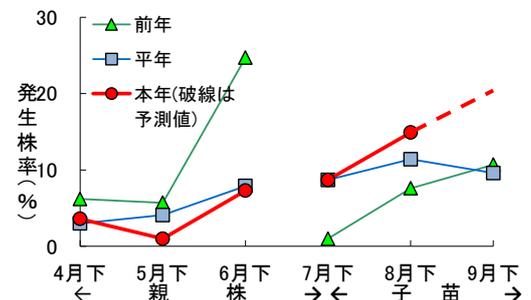


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容
発生量：平年より少ない (前年並)

2) 予報の根拠
(1) 子苗での発生の現況
①巡回調査(図1参照)
発生株率：0% (平年5.5%、前年0.7%)
平年比：やや少(一～±) 前年比：並(±)
(2) 9月の気象予報
気温が高く、やや少発生の条件(一～±)

3) 防除上注意すべき事項
(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

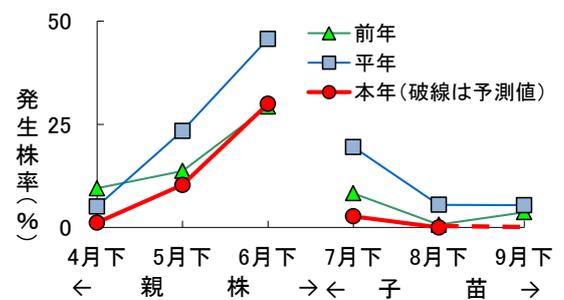


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 子苗での発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

②現地での発生状況

一部圃場で多発生している（±～+）

(2) 9月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

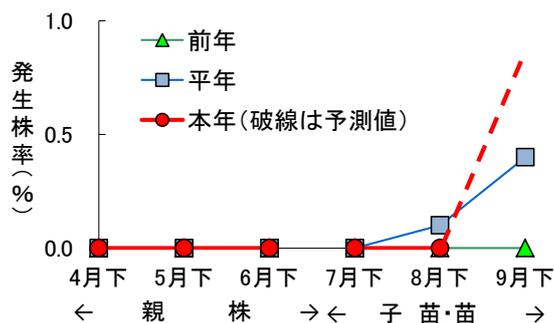


図1 イチゴ炭疽病・疫病の発生推移

アスパラガス

巡回調査（8圃場）

調査日：8月17日～23日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：23.1%（平年10.0%、前年15.6%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。



巡回調査圃場の様子

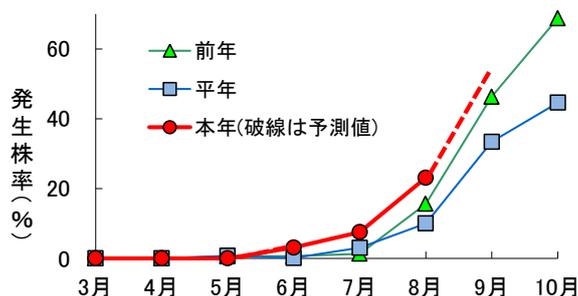


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0.6%（平年0.8%、前年1.3%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 9月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

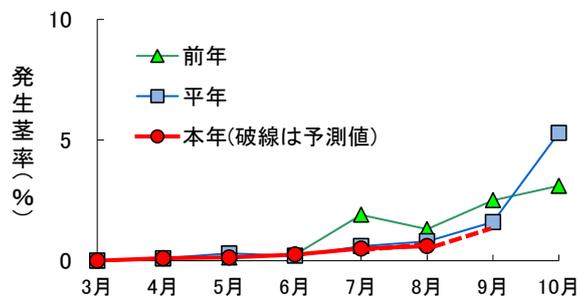


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

3. アザミウマ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：18.1%（平年23.1%、前年36.9%）
平年比：並（±） 前年比：少（-）
 - (2)9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

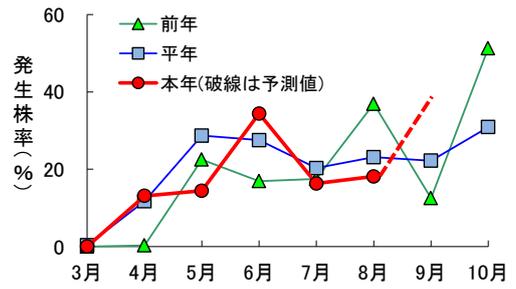


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

4. ハダニ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
発生株率：1.3%（平年2.4%、前年0.6%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2)9月の気象予報
気温が高く、多発生の条件（+）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)特記事項を参照。

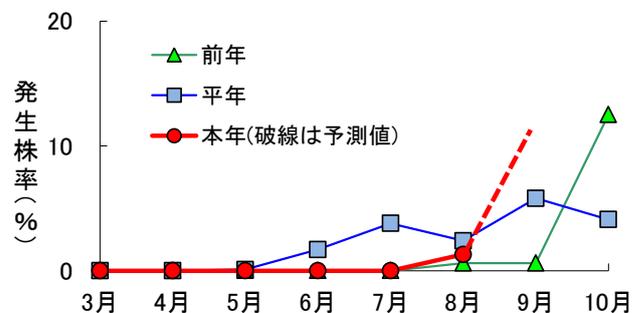


図1 ハダニ類のアスパラガスでの発生推移

野菜・花き共通

1. チョウ目害虫（ハモンヨウ、材バコガ）

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①巡回調査（図1参照）
イチゴにおける食害株率：0%（平年0.4%、前年0%）
平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）
アスパラガスにおける食害株率：0%（平年2.1%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）

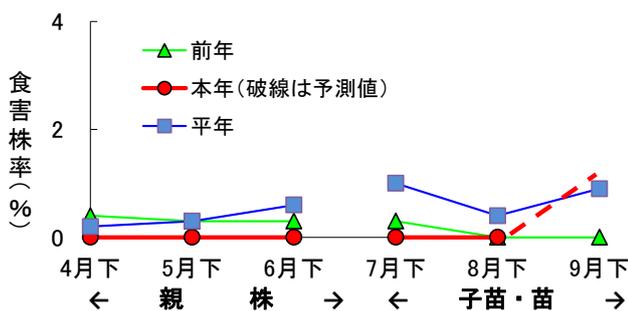


図1 イチゴ苗でのチョウ目害虫による食害株率

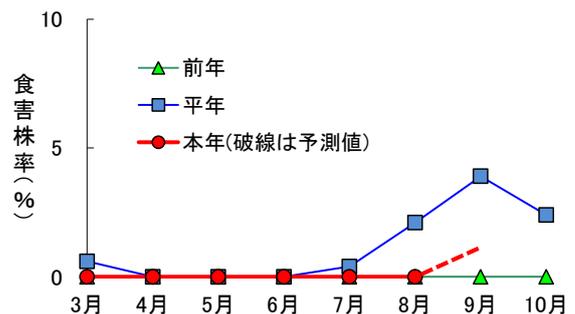


図2 チョウ目害虫のアスパラガスでの食害株率

②フェロモントラップによるハスモンヨトウ及びオオタバコガの8月の誘殺数は、平年並～やや多く推移している（図3～4）。〈±～+〉

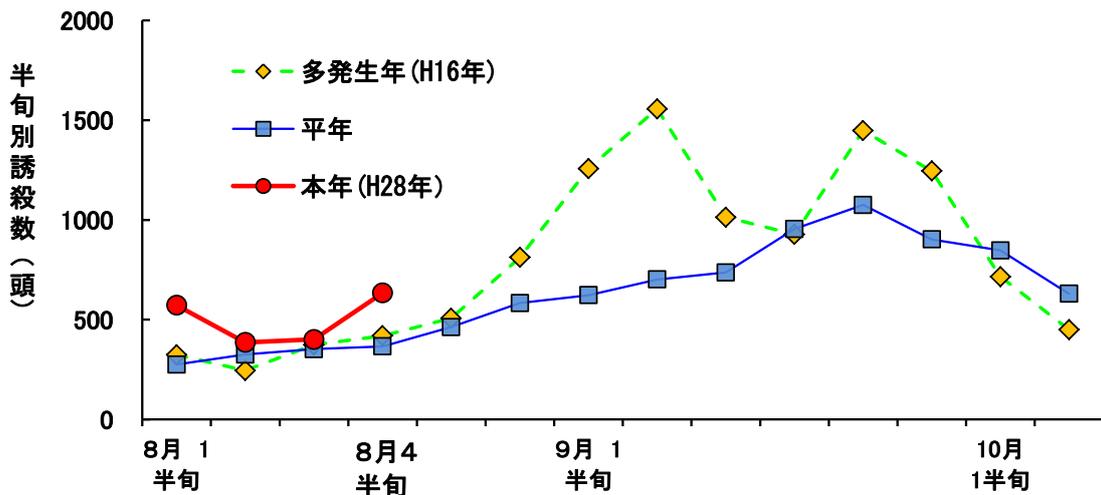


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数（10月2半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。）

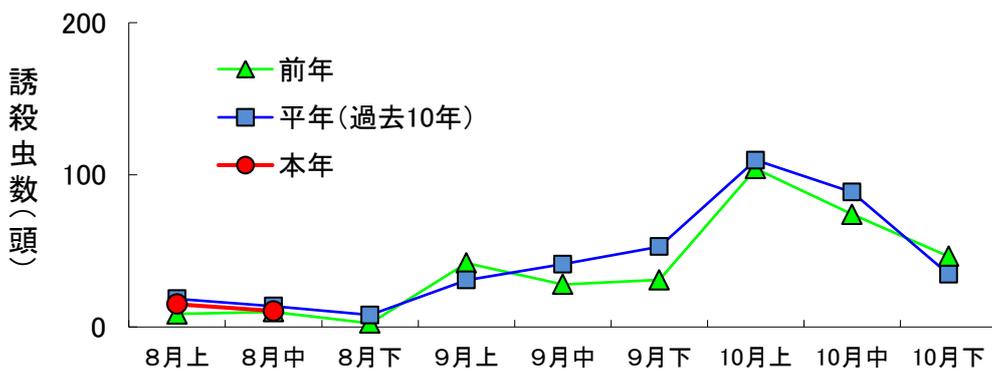


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
（病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する。

カンキツ

巡回調査 (8圃場)
8月18～22日



巡回調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①巡回調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.3%、前年0%） 平年比：やや少〈-～±〉 前年比：並〈±〉

発生果率：0%（平年0.1%、前年0%） 平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

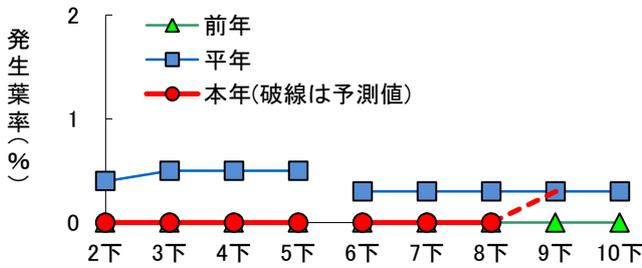


図1 カンキツかいよう病 (葉) の発生推移
(注: 5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

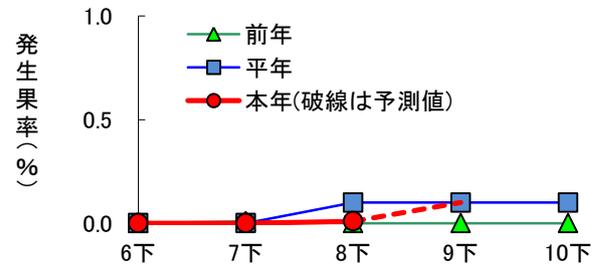


図2 カンキツかいよう病 (果実) の発生推移

- (2) 9月の気象予報
並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年発生園や、風当たりが強い園、罹病性品種 (ネーブル、はるみ等) が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) では、20~25 日間隔で無機銅剤 (クレフノン 200 倍加用) の散布を行う。
- (2) 発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定は枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。
- (3) ミカンハモグリガの幼虫の食害により発病が助長されるので新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) ではハモグリガ防除を併わせて実施する。
- (4) その他は特記事項を参照。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生果率: 38.0% (平年 10.4%、前年 16.6%)
平年比: 多〈+〉 前年比: 多〈+〉

(2) 9月の気象予報

並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布の再散布は、積算降雨量が 200 mm~250 mmに達した時点を目安とする。ただし、積算降雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。なお、マンゼブを含む農薬を4回使用した場合は、他の薬剤で対応する (マンゼブの使用回数は4回以内)。
- (2) 防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。
- (3) その他は特記事項参照。

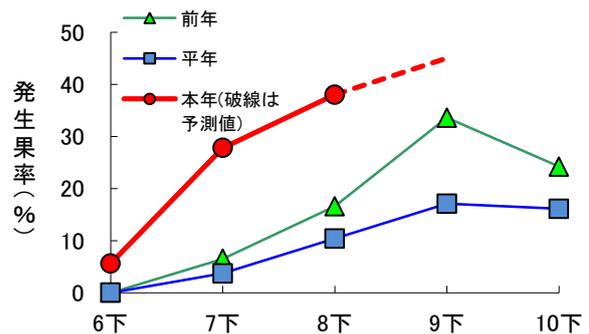


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生葉率: 16.3% (平年 8.2%、前年 2.9%)
平年比: 多〈+〉 前年比: 多〈+〉

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

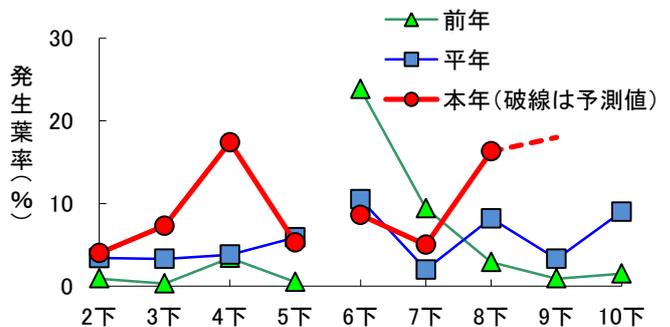


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
(注: 5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の散布とする。また、前年使用した殺ダニ剤は散布しない。
- (2) その他は特記事項参照。

ナシ

巡回調査 (6圃場)

8月19日



巡回調査圃場の様子

1. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①フェロモントラップ (図1 参照)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

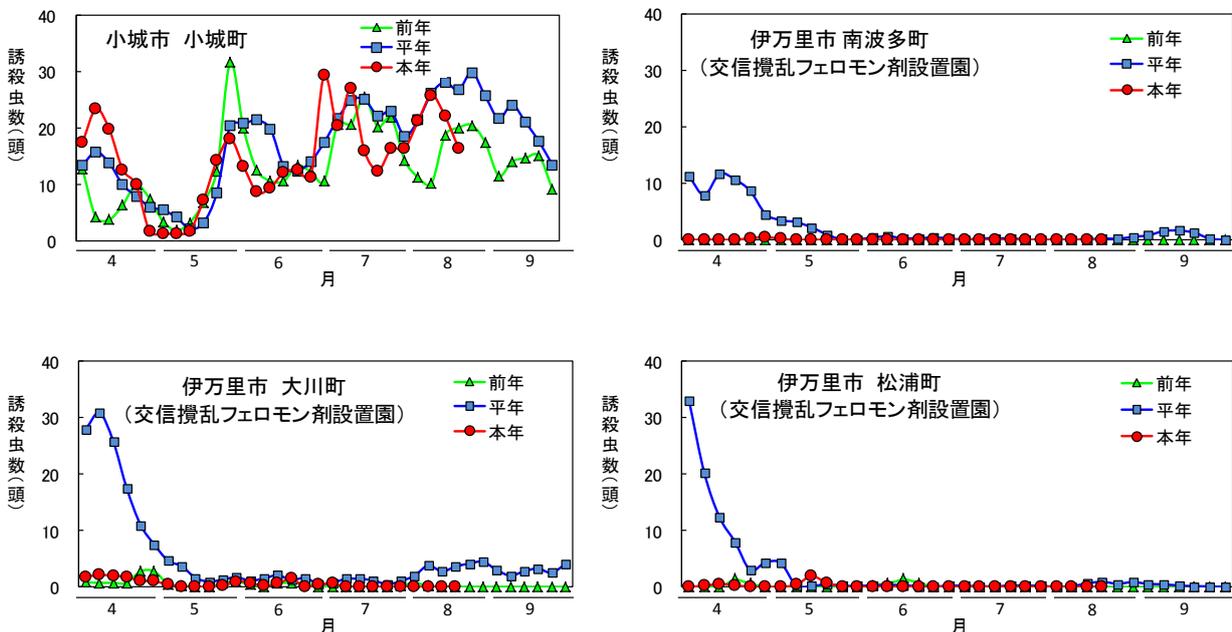


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移 (果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

②サクラに設置したフェロモントラップ (表1)

サクラに設置しているフェロモントラップ (伊万里市3か所) での、8月第1~4半旬までの誘殺数は前年並~やや多い(±~+)。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシクイの誘殺数 (頭)
(西松浦農業改良普及センター調査) ※8月第1~4半旬の合計値

地点名	H26年度	H27年度	H28年度
伊万里市 南波多町	1	1	0
伊万里市 大川町	20	14	53
伊万里市 新天町	57	38	36

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2) 交信攪乱フェロモン剤を設置している園においても、10~14日間隔で薬剤散布を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：26.5%（平年6.4%、前年11.2%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

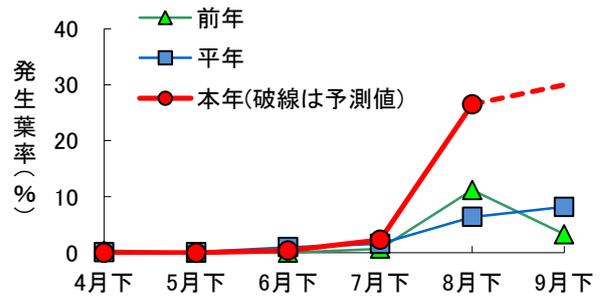


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

ブドウ

巡回調査（6圃場）

8月18～19日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：1.7%（平年7.7%、前年0.6%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨により発病が進展するので、降雨前の予防散布を徹底する。

(2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）については、耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

(3) その他は特記事項参照。



巡回調査圃場の様子

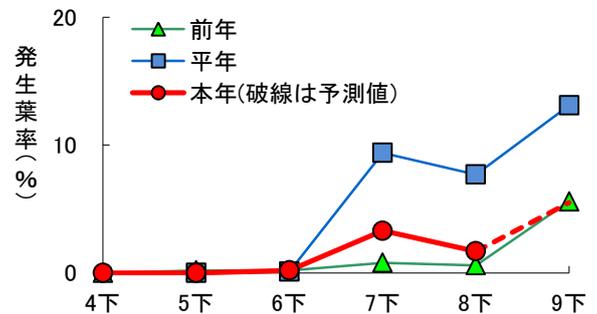


図1 ブドウベと病の発生推移

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠（発生量）

(1) 発生の現況

①予察灯（図1参照） 平年比：少（-） 前年比：並（±）

②フェロモントラップ（図2参照） 平年比：少（-） 前年比：やや少（-～±）

③ヒノキ毬果における寄生数（表1参照、8月18～22日調査）

成幼虫数平均：8.7頭（平年12.1頭、前年2.4頭） 平年比：並（±） 前年比：多（+）

④ヒノキ毬果における口針鞘数（表1参照、8月18～22日採取、8月19、22日調査）

口針鞘数平均：5.5本/果（平年12.7本、前年14.0本）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 果樹園への飛来予測時期

(1) 口針鞘数を基に算出した果樹カメムシ類の果樹園への飛来時期は、表1のように予想される。ただし、予想と異なることがあるため園内をよく観察して状況の把握に努める。

4) 防除上注意すべき事項

(1) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪定をする。

(2) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。

(3) 県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「[病害虫データ情報](#)」を参照する。

(4) その他は特記事項を参照。

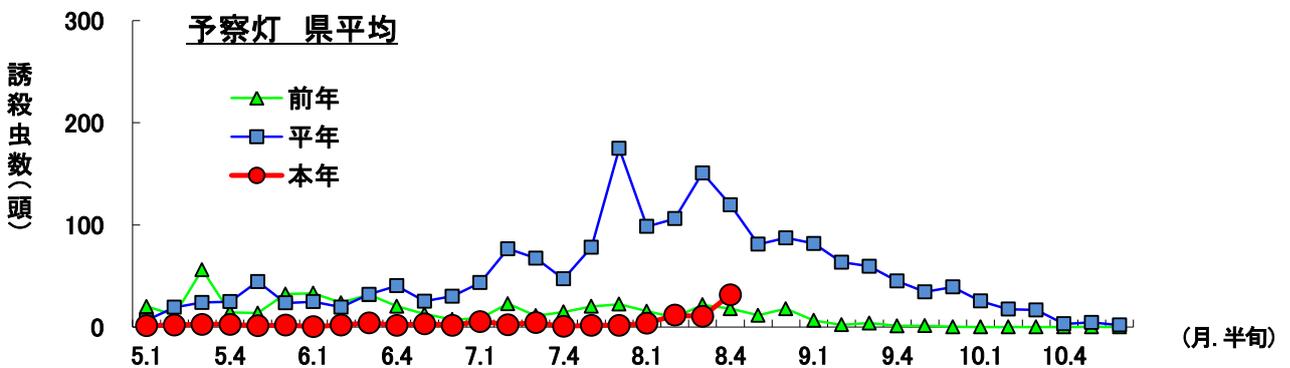


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

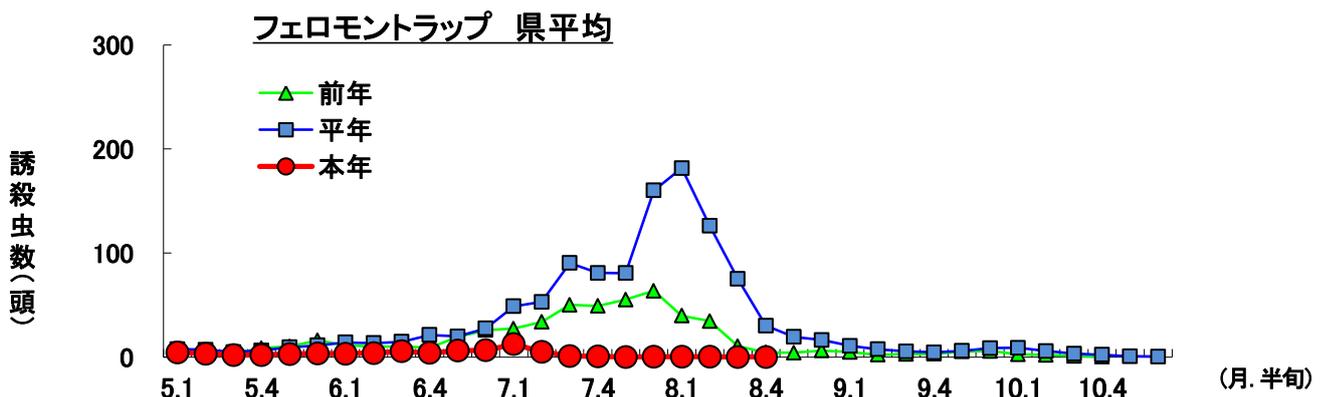


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉、唐津市鎮西、基山町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針翰数

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況					口針翰数調査 1) (寄生状況調査時にサンプル採取)			離脱予想時期 (各調査日から算出)	ヒノキ毬果 2) 着果程度 (7/15~21 調査)
		7月下旬 (7/15~ 21) 合計	8月上旬 (8/3~5) 合計	8月下旬(8/18~22)			7月 下旬 (7/22)	8月 下旬 (8/8)	8月 下旬 (8/19,23)		
				成虫	幼虫	合計					
1	上峰町*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
2	神埼市	0	2	0	2	2	0.1	0.3	2.3	10月1半旬頃~	やや少
3	小城市	1	4	2	0	2	0.1	2.0	5.4	9月5半旬頃~	やや少
4	多久市*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
5	唐津市1	2	6	2	30	32	0.1	2.0	23.0	8月5半旬頃~	やや少
6	唐津市2	0	3	14	13	27	0.2	0.4	1.0	10月2半旬頃~	中
7	伊万里市1	0	0	5	0	5	0.0	0.1	2.1	10月1半旬頃~	少
8	伊万里市2	2	6	10	6	16	0.0	1.2	13.2	8月6半旬頃~	やや多
9	伊万里市3*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少
10	白石町	1	0	3	1	4	0.1	0.3	0.9	10月2半旬頃~	中
11	鹿島市1	0	13	2	4	6	0.1	1.9	7.3	9月3半旬頃~	中
12	鹿島市2	0	0	1	3	4	0.1	0.1	0.1	10月2半旬頃~	中
13	鹿島市3	1	0	0	0	0	0.0	0.1	10.2	9月1半旬頃~	中
14	太良町1	0	0	4	1	5	0.2	0.5	0.5	10月2半旬頃~	やや少
15	太良町2	3	1	0	1	1	0.1	0.3	0.6	10月2半旬頃~	少
	平均	0.8	2.9	3.6	5.1	8.7	0.1	0.7	5.5	-	-
	平年	13.2	13.3	-	-	12.1	1.9	6.7	12.7	-	-
	前年(H27年)	7.6	4.4	-	-	2.4	0.9	8.9	14	-	-

※3地点についてはヒノキ毬果量が少なく、ヒノキ毬果の着果程度のみ調査した。

- 1)口針翰数が1果当たり25本を超えると、ヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向にある。離脱予想時期は口針翰数をもとに計算。
 2)ヒノキ毬果着果程度：福岡総農試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査(下記区分)
 ・極少：ほとんど結実が見あたらない 少：梢頭部にわずかに結実 やや少：梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
 ・中：梢頭部から中央部付近にかけて結実 やや多：梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
 ・多：梢頭部から最下部にかけて全面的に結実 極多：梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

茶 巡回調査(7圃場)
8月18~19日

1. 炭疽病

1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査(図1参照)

発生葉数：1.9枚(平年6.4枚、前年4.0枚)

(発生圃場率：42.9%)

平年比：やや少(一~±) 前年比：並(±)

(2)9月の気象予報

並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1)秋芽の充実と翌年の菌密度を抑えるために、秋芽生育期(萌芽期~三葉期)の防除を徹底する。

(2)発生圃場では整枝により罹病葉を除去し、日当たりおよび通風をよくする。



巡回調査圃場の様子

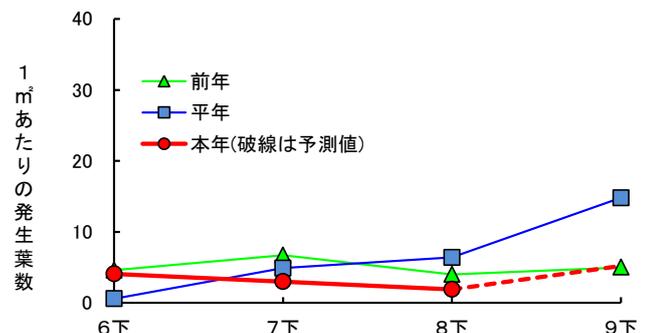


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉率：3.6%（平年3.5%、前年8.8%）

（発生圃場率：57.1%）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

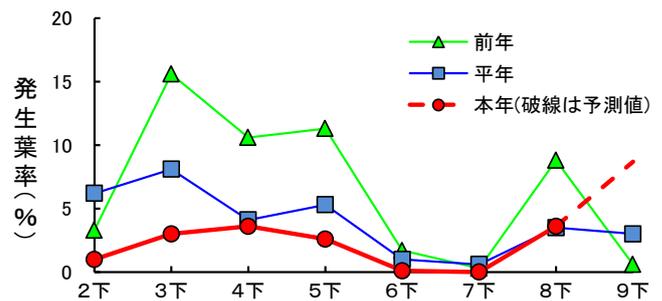


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

3. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：21.4%（平年24.2%、前年19.2%）

（発生圃場率：42.9%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

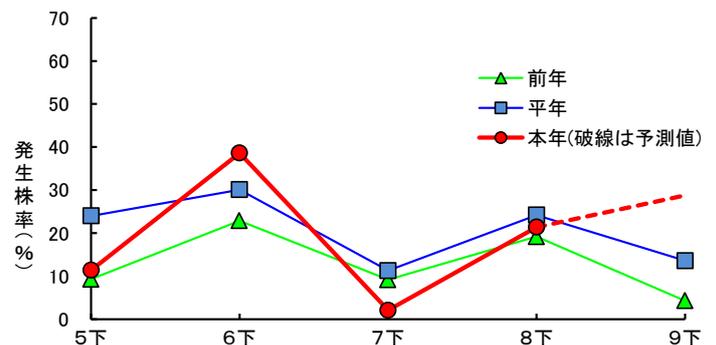


図1 クワシロカイガラムシの茶での発生推移

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生虫数：7.0頭（平年3.5頭、前年2.0頭）

（発生圃場率：71.4%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、薬剤が葉裏へ十分にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

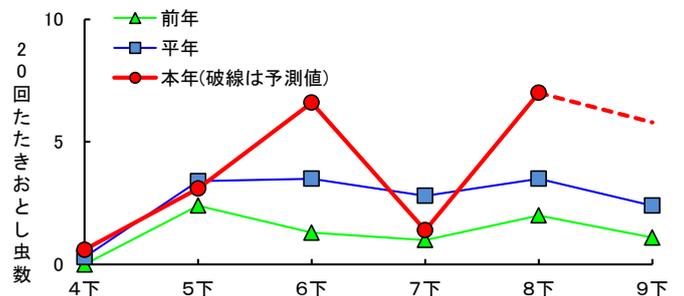


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生虫数：73.6頭（平年26.1頭、前年12.8頭）

（発生圃場率：100%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：やや少〈-〜±〉 前年比：やや少〈-〜±〉

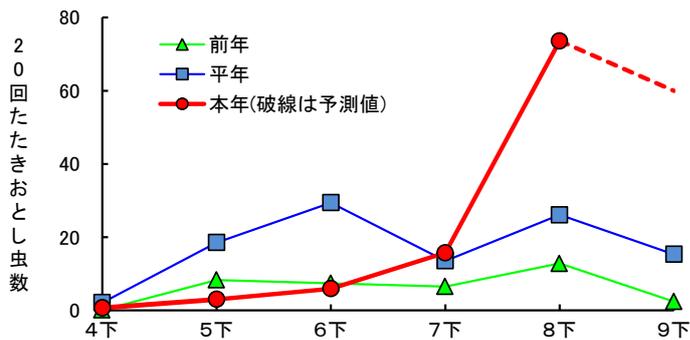


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

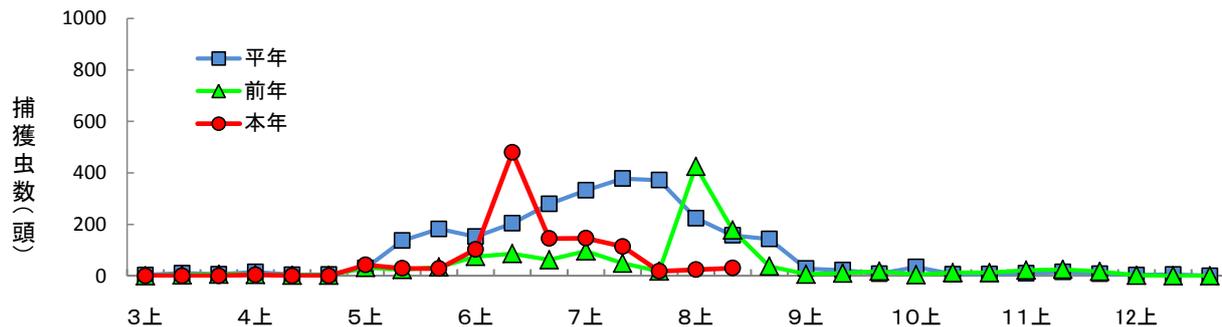


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの捕獲虫数の推移

（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(2) その他については、特記事項を参照する。

6. チャノココクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生葉数：0枚（平年4.8枚、前年0枚）

（発生圃場率：0%）

平年比：やや少〈-〜±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

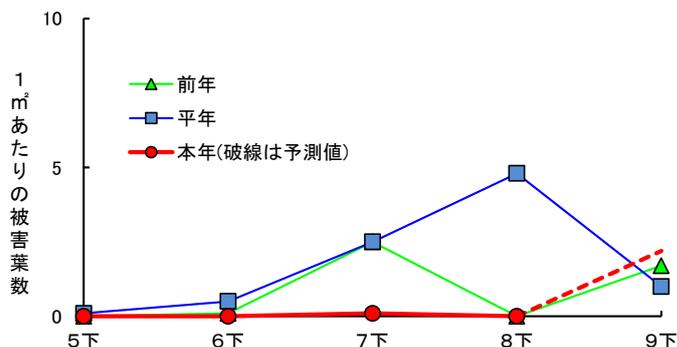


図1 チャノココクモンハマキの被害葉数の推移

7. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

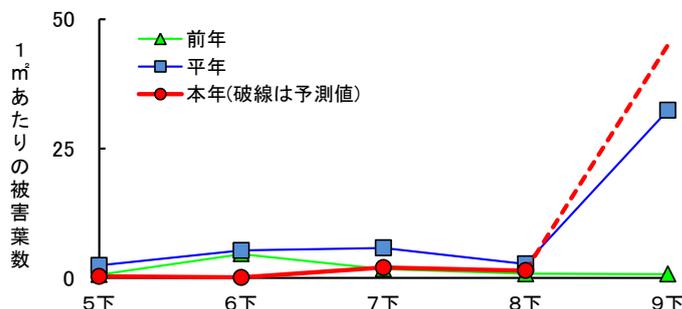


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

①巡回調査（図1参照）

発生葉数：1.4枚（平年2.7枚、前年0.8枚）

（発生圃場率：42.9%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：やや少（一～±） 前年比：やや少（一～±）

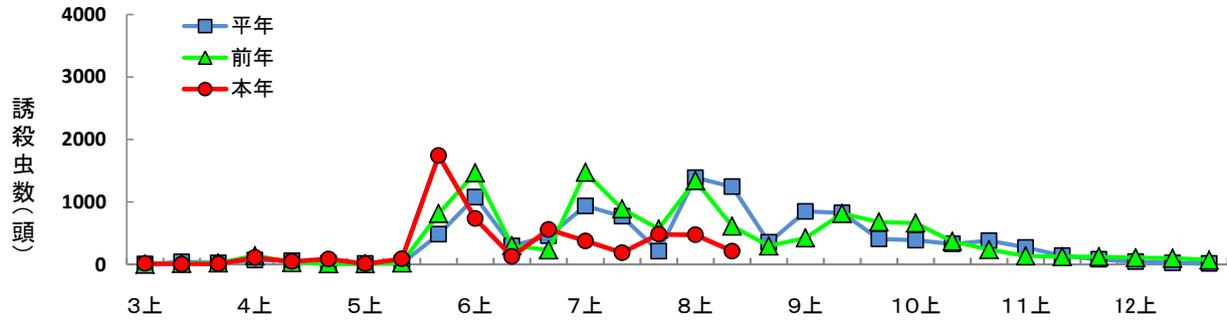


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの誘殺数の推移
（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2)9月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に7月26日～8月25日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）

作物名	病害虫名	九州・沖縄・山口		その他の都道府県	
		注意報	警報	注意報	警報
水稲	斑点米かみシ類			8/4 山形県 8/22 秋田県	
	いもち病	8/3 宮崎県		7/27 埼玉県 7/28 滋賀県 8/1 徳島県 8/5 長野県	
	セジロウンカ			8/5 広島県	
イチゴ	ハダニ類	8/8 熊本県			
トマト	すすかび病	8/1 大分県			
	コナジラミ類	8/1 大分県			
さとうきび	野そ	7/28 沖縄県			

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

作物名		病害虫名	発表日及び発信元
野菜	キュウリ	ホモプシス根腐病	7/29 新潟県
	サツマイモ	ヨツモンカメノコハムシ	8/3 山口県
果樹	ウメ	クビアカツヤカミキリ	8/2 大阪府
	ニホンナシ	ニホンナシハモグリダニ（仮称）	8/10 栃木県
花き	ツバキ	チャトゲコナジラミ	8/22 新潟県

農薬の適正使用を徹底しましょう！

◎農薬を使用する際は、事前にラベルをよく確認しましょう。

- ・ 農薬の登録内容は変更されることがあります。使い慣れた農薬でも、ラベル等で登録内容を確認して使いましょう。

◎農薬を散布するときには、農薬の飛散に注意しましょう。

- ・ 風向きに注意して風の弱いときに散布しましょう。
- ・ 散布の位置や方向に注意して散布しましょう。
- ・ 適正なノズルを用いて、適正な圧力で散布しましょう。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45-5297 FAX (0952) 45-5085
Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp